

# イスラームに学ぶ多文化共生

松 永 繁

日本福祉教育専門学校

## Multicultural Symbiotic Societies learning from Islam

Matsunaga Shigeru

Japan Welfare Education College

**抄録：**介護福祉分野において外国人介護職が増加している。その中にはイスラーム教徒も多数存在しており、彼らとの協働の機会も増えているが、宗教への理解や生活習慣への理解の困難さも報告されている。

本稿では、多文化共生の視座を得る目的で、イスラームの世界観をキーワードに検討した。結果、イスラームはお互いの世界観の存在を前提に自らのイスラーム世界の律法の対象としない等、他世界への侵入を行わないことで共生を実現してきたイスラーム観が存在していた。

また、多文化共生の障壁として、対等な関係性を前提としていない社会的構造が存在し、これが並行社会へと向かうことにもつながる。

以上のことから、多文化共生実現のためには、宗教の教義や文化、習慣といった理解に終始するのではなく、文化相対主義の視点と対等な関係性を前提とした社会的構造の構築の必要性が示唆された。

**キーワード：**多文化共生、文化相対主義、並行社会、社会的構造

### 1. はじめに

近年、介護福祉の分野において外国人介護職が増加している。しかし、外国人介護職といってもその背景は異なっている。

現在、介護福祉の現場で働く外国人介護職の背景として、日本人と結婚し日本に定住している在日の外国人が、介護の職業を選び働くというタイプと、もうひとつは、経済連携協定（EPA）によって介護福祉士候補者として介護現場で働くものである。この介護福祉士候補者が介護福祉士国家試験に合格すれば、日本で介護職として働くことができるようになる。

そして、2016（平成28）年に、外国人の技能実習の適正な実施及び技能実習生の保護に関する法律（外国人技能実習制度）が改正され、介護分野にも

拡大された。

この法律に基づき早ければ2017（平成29）年の11月から、技能実習生が来日し、介護現場で働くことになり、介護福祉現場での外国人介護職の数はますます増加することが予想される。

先行研究において、外国人介護職は言葉の壁などで多くの困難を抱えていることの他に生活習慣、文化、宗教の相違が介護に従事する際の障壁となることも報告されている<sup>1) 2)</sup>。

そして、日本で介護職として働く外国人の中にはイスラーム教徒が多数存在し、今後も増加することが考えられるが、日本人にとってイスラームはなじみが薄い。そのため理解も容易ではなく、介護福祉現場において協働を妨げる要因ともなっている。

## II. 目的

本稿では、まず、日本人のイスラーム理解がなぜ容易ではないのかについて、「イスラームの世界観」に焦点を当て検討していく。次に、イスラームの世界観における多文化共生のあり方を考察し、日本における介護福祉現場で協働していくために必要な視点について示唆を得ることを目的とする。

## III. イスラームの世界観

イスラームは中東の宗教と思われがちであるが、イスラーム教徒は中東だけではなく、インドネシア、マレーシアなどの東南アジアにも存在しており、世界におけるイスラーム教の人口は約15億人とも言われている<sup>3)</sup>。

イスラーム教はアッラーが預言者ムハンマドに啓示を下すことでもたらされた律法の宗教であると説明される。アッラーから預言者ムハンマドへの啓示は22年間続いたとされ、それらを後に集録したのがコーラン（アラビア語の表現ではクルアーン）である。このコーランがイスラーム教徒の根本聖典であり、イスラーム法（シャリーア）の法源として、また、信仰について言及されている。

そして、イスラームの世界観は「ダール・サラーム」と呼ばれるイスラーム教徒の共同体の世界と「ダール・ハルブ」と呼ばれる戦争、混乱の世界とで構成されている。

日本人は、世界の人々と同じ世界に住んでいることを前提に、言語や文化、宗教、生活習慣や考え方が異なるだけだと解釈しがちであるが、イスラーム教徒は世界中の人々と同じ世界に存在しているとは考えない。イスラーム教徒は、アッラーがもたらしたイスラームの律法の下、独自のイスラームの世界観の中で生きているのである<sup>4)</sup>。

## IV. 死生観

イスラームでは、イスラーム教徒には来世の天国が保障されている。しかし、イスラームの信仰について不信仰であった場合、天国への保障はされない。そのために現世で守るべきことを守り信仰を行なうこと、つまり、六信五行が求められる。六信とは、神（アッラー）、天使（マラーイカ）、啓典（キターブ）、預言者（ナビー）、来世（アーヒラ）、天命

（カダル）である。五行とは、信仰告白（シャハーダ）、礼拝（サラート）、喜捨（ザカート）、断食（サウム）、巡礼（ハッジュ）である。

イスラームでは、天国に行けるかどうかが決まる「最後の審判」の日が必ず訪れるとされているが、この最後の審判はいつなのかはアッラーのみぞ知ることになる。

イスラームでの死とは、人は一旦、死を迎え、魂は身体から離れるが、最後の審判を迎えた際に再び復活し、アッラーの御心に叶った信仰者は天国に行くという死生観を持つ。よって、イスラーム教徒は身体が無ければ復活ができないことから火葬を行わずに土葬にするのである。

また、筆者はエジプトで以下の話を聞いた。「幽霊というものは存在しない。最後の審判まで皆眠りにについているからである。よって、心霊写真というものも存在しない」。そして、「お墓は怖いところでもない」。

日本では、輪廻転生を前提としている日本人が多い。よく「今度生まれ変わったら」と話すことがあるように「前世」「来世」がある世界を生きている。そして、一度、死を迎えると葬儀を行い、死者が無事にあの世に行けるように願う。そして、死者は「あの世」へ行き、「あの世」から残った者を見守る。そして、「あの世」から現世に戻る時期がお盆である。

このように、死生観を見ても明らかなように、イスラームの世界で生きる者と日本人の世界観は全く異なり、同じ世界で生きているとは言えないのである。

## V. 多文化への寛容性

イスラームでは、ユダヤ教とキリスト教は「啓典の民」とされる。この意味は次の通りである。

イスラームでは、ユダヤ、キリスト教ともにアブラハムを共通の祖とする宗教であると捉える。そのうえで、アッラーは、まず、啓示をユダヤ人にもたらした。しかし、後にアッラーがもたらした啓示をアッラーの意に反した解釈や行いを始めたため、次にキリスト教としてもたらした。そして、また同様にアッラーの意に反したため、最後に預言者ムハンマドへ啓示が降されイスラームがもたらされたと説明される。よって、イスラームは最後にもたらされ

た完成された宗教と解釈されている。

イスラームから見れば、ユダヤ教の「ヤハウェイ」もキリスト教の「ゴット」も「アッラー」であり同じ神を指しているのである。そして、例えばキリスト教の聖書も、神がキリストへ啓示を行ない、キリストが伝えたものが記載してあるのだから、当然、大切にしなければならないと考えているし、キリストも敬う対象となっているのである。

そして、これら3つの宗教は同じ中東から誕生しており、古くから3つの宗教を信仰する者は共存して暮らしてきた。

渥美<sup>5)</sup>はこの共存ができた背景を、イスラームは律法によって成立しており、その対象は、イスラーム教徒のみに限られているからだと説明する。よって、渥美によればイスラーム世界に住むキリスト教、ユダヤ教徒は対象外とされる。

事実、エジプトには原始キリスト教とされるコプト教が存在しており、それを信仰しているコプト教徒がエジプトでは共存して暮らしていた。エジプトはイスラーム世界での世界最高学府とされ権威と影響力を持つアズハル大学が存在し、過去にイスラーム世界の帝国の首都ともなった場所である。そのようなイスラーム教徒が多数存在し、影響力を持っている国であるにも関わらず、コプト教徒はイスラーム教徒ではないため、飲酒も可能であり飲酒によって罰せられることはない<sup>6) 7)</sup>。

このようにイスラーム世界は、イスラーム教徒が生きる世界であり、他宗教を信仰している者とは同じ世界に存在しているとは考えない。

また、コーランには「宗教に強制があつてはならない」(雌牛章256)<sup>8)</sup>とあり、このことからイスラームが他宗教について非寛容的ではないことが理解できよう。

日本人は自身の信仰について「無宗教である」と安易に答える者が多いが、イスラーム教徒から見れば、他宗教を信仰していることよりも、何も宗教を信仰していないことの方が「無神論者」と見なされる問題であり、イスラーム教徒からは軽蔑されてしまうのである。

## VI. 不寛容さの誤解

では、なぜ、イスラームは不寛容さや戦闘的なイメージが存在するのであろうか。

日本人の多くは2001年以前、アラブ、イスラームというキーワードで訊いても答えられる者は少なかった。しかし、2001年に発生したアメリカにおける同時多発テロ事件により、多くの日本人はメディアを通してイスラームに関心を向けるようになった。

そして、この事件を発端として、アフガニスタン戦争、イラク戦争、アラブの春と中東情勢は不安定化し、その不安定化を背景にして「イスラーム国」が台頭することとなり<sup>9)</sup>、さらに不安定に拍車がかかった。

これらの出来事について日本人は、「右手にコーラン、左手に剣」と言われる戦闘的な印象をさらに強くさせる結果となったと考える。

前述したように、イスラームの世界観は、「ダール・サラーム」と呼ばれるイスラーム教徒の共同体の世界と「ダール・ハルブ」と呼ばれる戦争、混乱の世界とで構成されていると述べた。

イスラームでは、「ダール・サラーム」を侵されることは、イスラームの世界の危機であり、そこに属する個人の死をも意味する。よって、敵に対して立ち向かわねばならないし、防衛する努力が求められる。それがジハード、いわゆる聖戦なのである<sup>10)</sup>。

自分たちの領域を侵された際の戦いという根底には、元々のアラブにおける砂漠の民の部族としての気質があると言われる。砂漠においては個人で生きることは到底、困難であり、部族の崩壊は死を意味するのであるから、自らが属する集団を死守することは当然のことなのである。

しかし、自然が豊かな環境で、草木といった自然にも神が宿るという多神教の世界で暮らす日本人にとって砂漠という過酷な自然の中で生まれた一神教の世界観を理解することは容易いことではないだろう。

そして、2001年のアメリカ同時多発テロの後、キリスト教徒とイスラーム教徒との対立について、西欧文明とイスラーム文明の衝突というサミュエル・ハンチントンの文明の衝突論が注目された<sup>11)</sup>。また、中世期の十字軍になぞらえて西洋諸国を新十字軍とする表現も見られた。

しかし、イスラームはキリスト教とは啓典の民で

あり、共存してきた事実から、宗教の相違のみで戦争に発展することは考えにくい。アメリカとイスラームとの対立は、「ダール・サラーム」を侵すアメリカに対するジハードであり、キリスト教とイスラームとの宗教観の対立では説明できないのである。

では、「ダール・サラーム」を侵すアメリカとは何か。それは、自国の民主主義をイスラーム世界に押し付け、西洋文化を拡大させようとすることに對するイスラーム世界との戦いと見なすイスラーム教徒が多数存在していた。

そして、アメリカ同時多発テロ当時、エジプトではある話題が人々によって語られていた。それはコーランが、アメリカにおける世界貿易センタービルへのテロを予言していたというものであった。

それはコーランの悔悟章にある以下のものである。「アッラーを畏れ、かれの御喜びを求めてその家の礎を定め建てるものと、砕け壊れそうな崖のふちにその家の礎を定めて建て、地獄の火の中に共に砕け落ちる者と、どちらか優れているか。アッラーは不義を行なう民を導かれぬ。」「かれらの建てた建物は、かれらの心が細かく砕かれぬ限り、かれらの心中の疑惑不安の種となろう。アッラーは全知にして英明であられる。」<sup>12)</sup>

このコーランの箇所は、比喩としての表現であるが、現地では、建物は世界貿易センタービルと解釈しそれが崩壊することが述べられていると話されていた。

この事例では、イスラーム世界を脅かす、侵す者はアッラーへ背くことであり、必ず報いを受けるという思想を持っていることを示していた。逆に、イスラーム世界を侵さない他宗教者に対しては、イスラームの律法を遵守しなくてもそれはアッラーへ背くことにはならないし、敵とは見なされないのである。

ちなみに、ジハードは聖戦という意味で現在使用されているが、元々は、信仰者としての自身の内面の努力を意味するものであった。ジハードの単語の原型は「ジャハダ」であり、それはアラビア語で努力するという意味である。

## VII. 多文化共生のために

イスラームには日本人とは異なった世界観が存在し、その世界観の中でイスラーム教徒は生きている

ことをみてきた。そして、世界観が異なることを前提とした対等な関係の下での多文化共生が、長年イスラームの世界では行なわれてきた。

イスラームでは、異なる世界観が存在していることを前提にしているため、自分たちの信仰や律法を適用しないことを述べてきた。

イスラームにみる多文化共生の前提は、お互いが異なる世界観を持ち、そこに優劣は存在しないし、お互いの世界を侵すことを避ける文化相対主義に基づく対等な関係なのである。これによって、イスラーム世界は多文化共生を実現してきたと言えるのである。

よって、多文化共生のためには、共通した土台となる世界観は存在せず、異なる世界観の中で生きていること、お互いの世界を侵さないという前提から出発する必要があると考える。

では、多文化共生が実現できない社会の場合、どのような方向に向かうことになるのであろうか。

多文化共生が実現できない社会では、同じ地域で多様な文化を持つ人々が暮らしながらも、同じ境遇に生きる人々が集まり、コミュニティーを形成するという並行社会が生まれる要因となる。並行社会は、一緒の地域に住んでいながら見えない壁で閉ざされ、交流の制限をしてしまう。

石川<sup>13)</sup>は並行社会の要因について、文化的要因と社会経済的要因があるとし、労働市場の分節化などの社会経済、法的制度要因等が複合的に関連していると述べている。

1997年にエジプトのルクソールにおいて日本人を含む63名の外国人観光客がイスラーム原理主義組織の「イスラーム集団」によって銃撃され殺害される事件が発生した。このイスラーム集団に属していたものの中には、貧困階層の者が多数存在していたとされる<sup>14)</sup>。

現在のイスラーム国に共鳴する者も、その背景には社会への不満があり、社会構造の中で陥った貧困が要因となって、過激な原理主義に傾倒してしまうと言われている。イスラーム過激原理主義とは、言い換えれば同じ境遇にある者同士が、社会に対して閉ざし自分たちのコミュニティーをつくり、その中で生きていくという並行社会の一つとみなすことができよう。

このように、多文化共生社会の障壁として、社会的構造が存在し、同じ境遇の者同士のコミュニティが形成される並行社会へと向かうことにもつながっていくのである。

現在の日本では、外国人労働者を低賃金や過酷労働に従事させることで社会が成立しているような社会的構造が存在する。

このような社会的構造が存在していれば、同様の境遇となった者同士が並行社会を形成することにつながりかねない。

そのため、対等な関係を前提とした社会的構造を構築していくことが必要となるのである。言い換えれば、日本において対等ではない関係性を可とするような就労の仕組み等の社会的構造がある限り、多文化共生社会の実現は難しいと言えよう。

今後、介護福祉分野で働く外国人介護職の増加により、日本人介護職との協働の機会も増えていくと予想できる。

そのため、日本人介護職が外国人介護職と共生していくためには、文化や生活習慣、宗教を理解することに終始するのではなく、対等な関係で介護の現場において働くことの出来る社会的構造の構築へも目を向ける必要がある。

## VIII. 結論

本稿では、イスラームにおける世界観に焦点を当て、多文化共生について検討してきた。そして、多文化共生のためには、相手の文化や生活習慣、宗教を理解することも大切だが、それだけでは真の多文化共生は実現しない。

多文化共生のためには、多様な世界観を認める文化相対主義の思想と対等な関係性を前提とした社会的構造の構築が不可欠であると考えられる。

## 謝辞

本論文の執筆にあたり、大学時代にイスラーム世界の深さ、魅力をご教授頂き、イスラームの世界に導いてくださった拓殖大学名誉教授の飯森嘉助教授に改めて感謝申しあげる。

## 文献

- 1) 前川有希子：外国人介護職員との協働について。静岡福祉大学紀要、第7号：87-93（2011）
- 2) 大野俊：看護・介護分野における日本の労働市場開放をめぐる国際社会学的研究の成果と課題。保健医療社会学論集、第21巻2号：35-52（2010）
- 3) 店田廣文：世界と日本のムスリム人口2011。人間科学研究、26、1、29-39（2013）
- 4) 渥美堅持：イスラーム教を知る事典。第3版、東京堂出版、東京（2001）
- 5) 前掲4)
- 6) 大稔哲也：エジプトを生きるイスラーム教徒とキリスト教徒 2011年エジプト「1月25日革命」までの歩み。藤女子大学キリスト教文化研究所紀要、13、1-38(2012)
- 7) 池田明史：中東キリスト教の現在 世界最古の信徒集団の回顧と展望。中東協力センターニュース、21-26（2010）
- 8) 高尾賢一郎：「イスラーム国」による宗教的社会の形成。応用社会学研究、58、233-242（2016）
- 9) 宗教法人日本ムスリム協会：日亜対訳・注解 聖クルアーン。241、宗教法人日本ムスリム協会、東京（2000）
- 10) 前掲4)
- 11) 八巻和彦：＜文明の衝突＞を超える視点。早稲田商学、427、91-124（2011）
- 12) 前掲9）P50
- 13) 石川真作：教育と多文化共生の関わりについて ドイツにおけるイスラーム教徒移民による教育への取り組みを中心に。東北学院大学社会福祉研究所研究業績書、39-51（2017）
- 14) 藤原和彦：イスラーム過激原理主義 なぜテロに走るのか。初版、中公新書、東京（2001）

受付日：2017年8月2日

